

田部重治歌碑

所在地 富山県富山市中市十二番地 山室小学校本館前

もの皆の変わりしと

きく

碑陰

ふるさと

昭和四十六年三月

の

贈 昭和四十五年度卒業生

わか学ひ舎は

高木岩造園

いかにあるらん

田部重治作歌

青柳石城書

略歴

田部重治 明治十七年八月四日 富山県上新川郡山室村東長江(現富山市)に生まれる 東大英文科卒業 昭和四十七年九月二十二日歿す 享年八十八歳 墓は富山市梅沢町三十七八 法華寺墓地と 東京都府中市多磨町 多磨霊園 九区二種十八側 十二番にある



田部重治歌碑

所在地 富山県富山市中市 11 番地 山室小学校 本館前

もの皆の変わりしと

きく

ふるさと

の

わか学び舎は

いかにあるらん

田部重治作歌

青柳石城書

碑陰

昭和四十六年三月

贈 昭和四十五年度卒業生

高木岩造園

略歴

田部重治 明治 17 年 8 月 4 日 富山市外山室村東長江(現富山市)に生れる
東大英文科卒業 昭和 47 年 9 月 22 日歿す 享年 88 歳 墓は富山市梅沢町
3-17-8 法華寺墓地と 東京都府中市多磨町 多磨霊園 9 区 1 種 18 側 21 番
とにある



音田

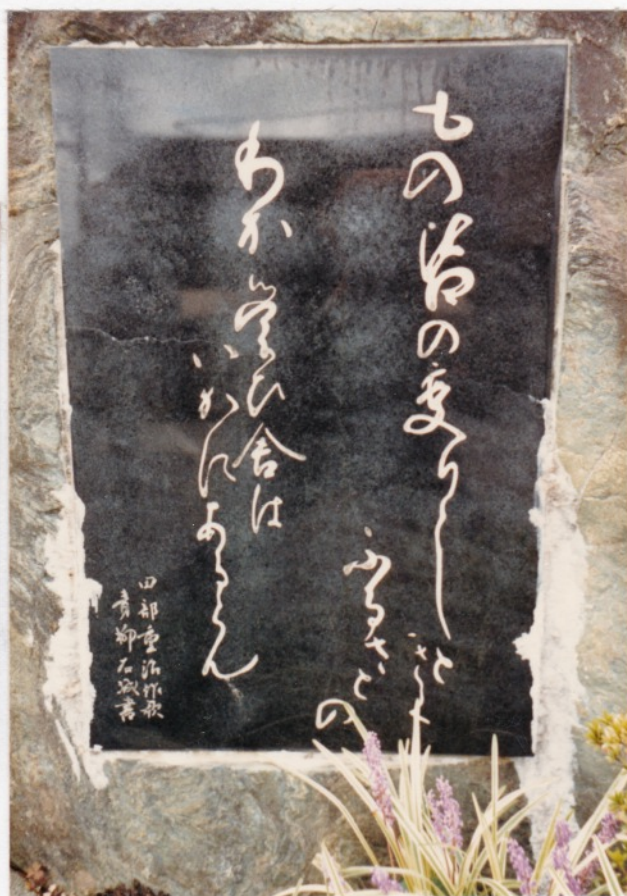
大井池

も

いささあひ

湖中館重満田

書銀百町青



谷川俊太郎詩碑

所在地 群馬県前橋市千代田町 3・12・10 前橋文学館前

横長でレリーフ像あり

第一回萩原朔太郎賞受賞

詩集「世間知ラズ」より

谷川俊太郎

碑陰

文字なし

言葉の

素顔を

見たい

平成五年十月



谷崎潤一郎歌碑

所在地 栃木県那須郡塩原町下塩原六五 妙雲寺境内

七絃の龍のしらへを友として

八十路の媼こゝろもさやけし 潤一郎

七絃の龍のはとりに年をへて

おうなの白髪いよゝ長けれ 潤一郎

碑陰

谷崎潤一郎先生歌碑

大正十年の夏から初秋にかけて谷崎潤一郎先生には、
妙雲寺門前の宮本ウメ宅の二階に約一ヶ月程逗留されま
した。その後、先生は昭和三十二年八月十二日、
三十八年振りに宮本家を訪れ宮本ウメの長寿を喜ばれ
熱海市伊豆山に帰られてから、これらの歌をお寄せ下さ
いました。 昭和五十八年 晩秋 西那須野町住

孫 宮本善夫 識

妙雲憲宗代

笹崎 勝刻



谷崎潤一郎歌碑

所在地 栃木県那須塩原市下塩原 665 妙雲寺境内

七絃の瀧のしらへを友として

八十路の媼こゑもさやけし 潤一郎

七絃の瀧のほとりに年をへて

おうなの白髪いよゝ長けれ 潤一郎

碑陰

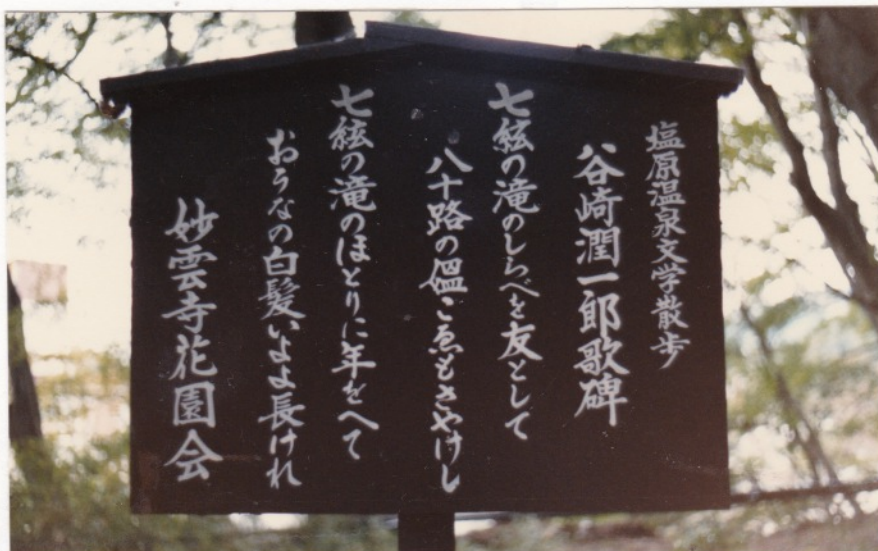
谷崎潤一郎先生歌碑

大正十年の夏から初秋にかけて谷崎潤一郎先生には、
妙雲寺門前の宮本ウメ宅の二階に約一ヶ月程逗留されま
した。その後、先生は昭和三十二年八月十二日、
三十八年振りに宮本家を訪れ宮本ウメの長寿を喜ばれ
熱海市伊豆山に帰られてから、これらの歌をお寄せ下さ
いました。 昭和五十八年 晩秋 西那須野町住

孫 宮本善夫 識

妙雲憲宗代

笹崎 勝刻





これは曾根野見や一跡の欄二の字とや本宮の諸門や雲似

日二十月八平二十三疎網は主流、菊の予、武」



谷崎潤一郎歌碑

所在地 栃木県那須郡塩原町下塩原七〇五 「ふるさと塩原」前

七絃の

滝のしらべを

友として

八十路の楯

こゝろもそやけし

谷崎潤一郎

碑陰

文字なし

略歴

谷崎潤一郎 明治十九年七月二十四日 東京日本橋蛸殻町に生まれる 東大国文科教授業料未納で除籍 昭和四十年七月三日歿す 享年七十九歳 法名 安樂壽院功譽文林徳潤居士 墓は京都市左京区鹿が谷 法然院墓地と 東京都豊島区西果嶋五・三五・三三 慈眼寺墓地とにある



谷崎潤一郎歌碑

所在地 栃木県那須塩原市下塩原 705 「ホテルニュー塩原」前

七 絃 の

滝 の し ら べ を

友 と し て

八 十 路 の 媼

こゑ も さ や け し

谷 崎 潤 一 郎

碑陰

文字なし

略歴

谷崎潤一郎 明治 19 年 7 月 24 日 東京日本橋区蠣殻町に生れる 東大国文科
授業料未納で除籍 昭和 40 年 7 月 30 日歿す 享年 79 歳 法名 安樂壽院功譽
文林徳潤居士 墓は京都市左京区鹿が谷 法然院墓地と 東京都豊島区西巣鴨
5-35-33 慈眼寺墓地にある



谷崎潤一郎誕生の地

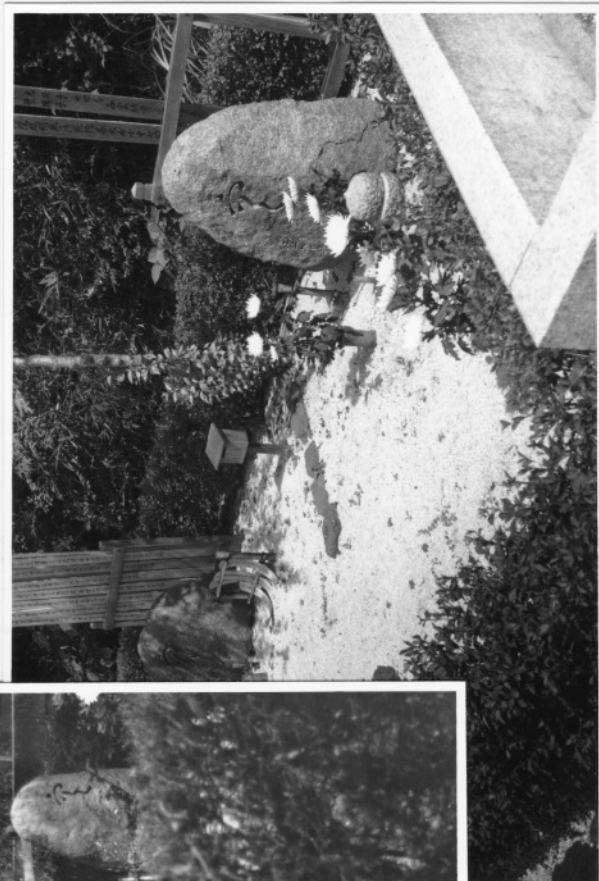
1886-1965

元 東京市日本橋区蠣殻町二丁目十四番地

松子書

谷崎潤一郎記念碑

所在地 東京都中央区日本橋人形町二丁目 ツカコシビル壁面



谷崎潤一郎記念碑

所在地 東京都中央区日本橋人形町 1-7-10 ツカコシビル壁面

谷崎潤一郎生誕の地 (横書き)

1886-1965

元

東京都日本橋区蠣殻町二丁目十四番地

松子書

京都市左京区鹿ヶ谷法然院墓也

空

潤一郎書

裏面

昌光院殿明善清昭徳善大居士

昭和三十四年十月十五日歿

渡辺 明

行年五十三才

清光院殿徳善清昭徳善大居士

重子

寂

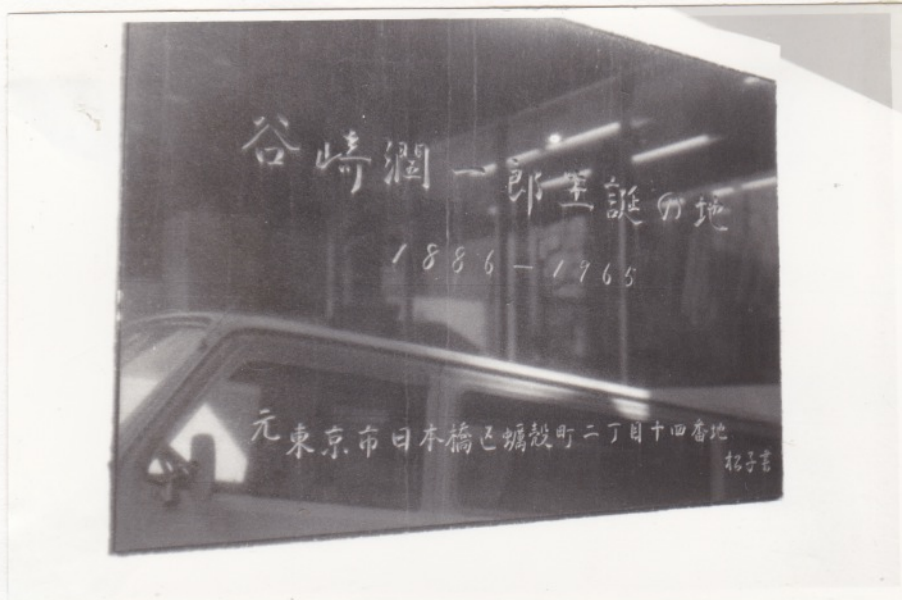
潤一郎書

裏面

安樂軒院功善文林徳潤居士

谷崎潤一郎

松子



谷

町

谷

(終正々々々々)



神奈川県河原町吉浜の相模山房
←



東京都法然院墓地の谷崎の墓(寂)
←

東京都法然院墓地の谷崎の墓(寂)

1969 第一回

谷崎潤一郎文学碑

所在地 京都府八幡市男山 石清水八幡宮 展望台

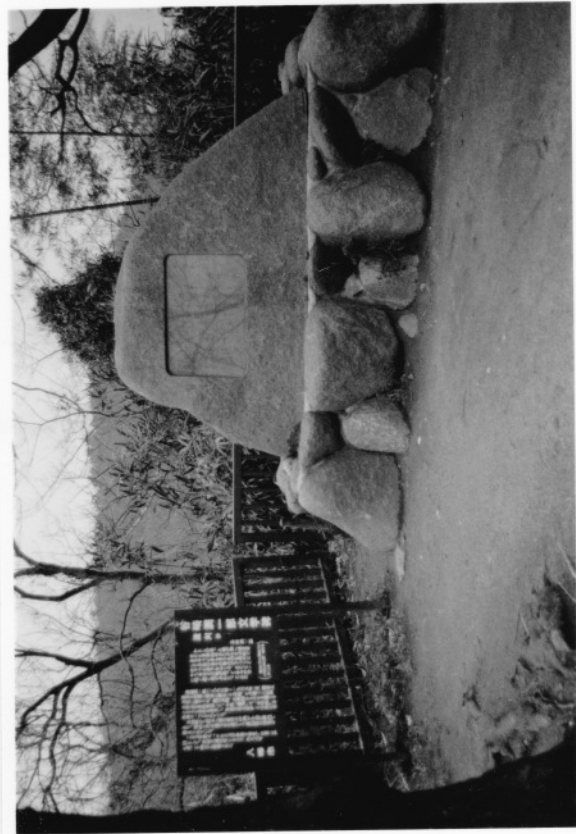
蘆刈抄

谷崎潤一郎

わたしの乗った船
が洲へ漕ぎ寄せたとき男
山はあたかもその繪に
あるやうなまんまるな月
を背中にして全山の
木々の繁みがびろうどの
やうなつやをふくみ、まだ
どこやらに夕ばえの色が残
つてゐる中空に暗く濃く
黒ずみわたつてゐた

碑陰

一九八六年七月
八幡市建立



谷崎潤一郎文学碑

所在地 京都府八幡市男山 石清水八幡宮 展望台

蘆刈抄

谷崎潤一郎

わたしの乗った船
が洲へ漕ぎ寄せたとき男
山はあたかもその繪に
あるやうなまんまるな月
を背中にして全山の
木々の繁みがびろうどの
やうなつやをふくみ、まだ
どこやらに夕ばえの色が残
ってゐる中空に暗く濃く
黒ずみわたってゐた



碑陰

一九八六年七月

八幡市建立

石清水八幡宮本殿



谷崎潤一郎文学碑

蘆刈抄

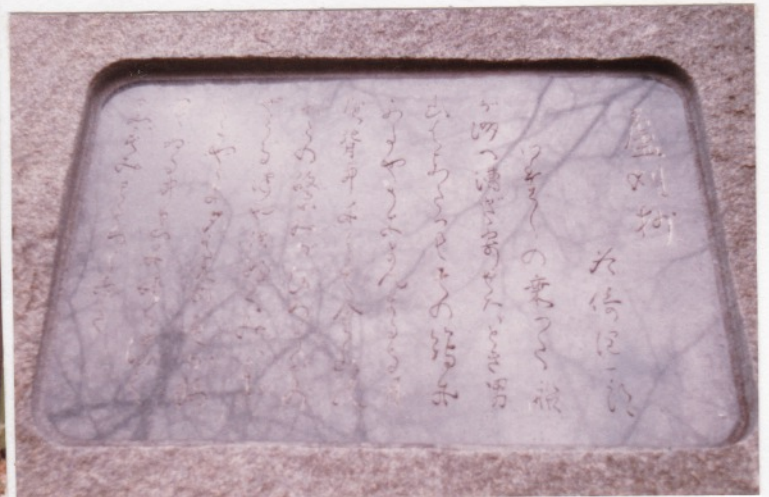
谷崎潤一郎

わたしの乗った船が洲へ着き寄
せたと男山はあたかもその絵に
あるやうにまんまるな月を背中に
して全山の水々の響みがびろうど
のやうな律をよめる。まだどこ
やら少ばえの色が染つてゐる中空
に暗く濃く思ひあつてゐた

（本文の字は、昭和八年
に刊行された第一回自筆
本による）

谷崎潤一郎（一八八六年—一九六五年）は、関東大
震災を契機に関西に移住して以降、その風土と伝統
文化に触れ、独自の文学的・古風的なものを主眼とし
る作品を多数発表した。小説「龍虎」には「蘆刈抄」に
とくにもその傾向が顕著で、永遠の美を追求した中期の名
作群の一つとされている。
大山崎から瀬木へ渡る淀川の中洲が小説の舞台で
あり、明山と月の情景は小説のもう一つの重要な効果
として、谷崎潤一郎の文学に大きな影響を与えている。
この文学碑は、「わたしと文学」をテーマとした第二回
目として、谷崎潤一郎生誕百年にあたる一九八六年
七月二十四日に設置された。

八幡市



谷崎潤一郎歌碑

所在地 奈良県吉野郡吉野町窪垣内兜 国栖(多)小学校下 畠園

ゆふされはく
ぬきはやしに
風たちて國栖
のやまもと秋は
来ぬらし

潤一郎

碑陰

文字なし

副碑

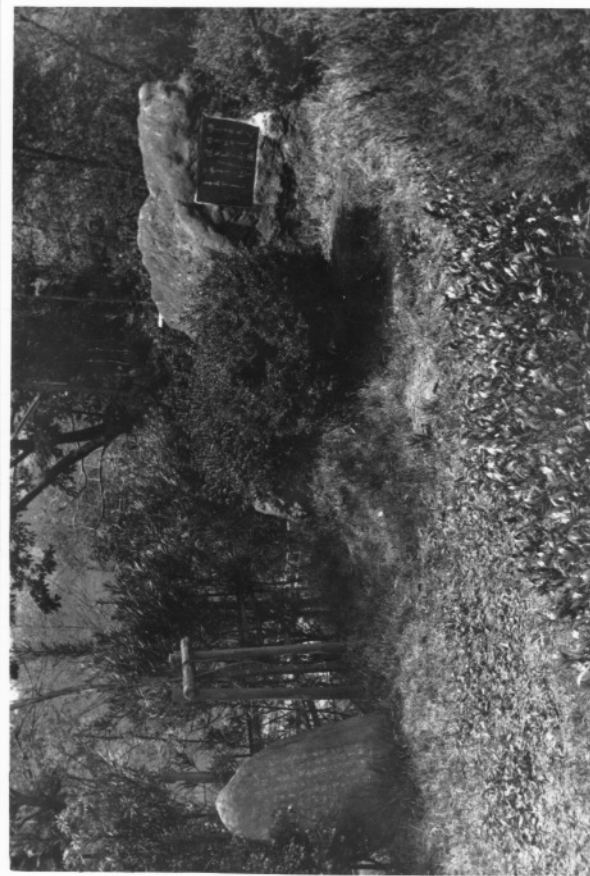
昭和五年晩秋吉野山にあった
谷崎潤一郎先生は上市宮滝菜摘
を経て吉野郡国栖村窪垣内に遊んだ
名作「吉野葛」がこうして生れた

その日先生に感懐一首がある刻
んでその足跡を偲びたい

昭和二年六月六日

副碑裏面

文字なし



谷崎潤一郎歌碑

所在地 奈良県吉野郡吉野町窪垣内 49 国栖(くず)小学校下 白狐園内

ゆ ふ さ れ は く
ぬ き は や し に
風 た ち て 國 栖
の や ま さ と 秋 は
来 ん ら し

潤 一 郎

碑陰

文字なし

副碑

昭和五年晩秋吉野山にあった
谷崎潤一郎先生は上市 宮滝 菜摘
を経て吉野郡国栖村窪垣内に遊んだ
名作「吉野葛」がこうして生れた

その日先生に感懷一首がある刻
んでその足跡を偲びたい

昭和四十一年六月十八日

副碑裏面

文字なし



第一圖



谷崎潤一郎文学碑

所在地 大阪府大阪市中央区日本橋一七六 文楽劇場近く歩道上

紋所

一 一 つ

紅殻^{べにがらぬ}塗りの框^{かまち}を見せた二重の上で算盤を枕
 に炬燵^{こたつ}に足を入れながら おさんの口説き
 をじつと聞き入つてゐる間の治兵衛 ——
 若い男には誰しもある 黄昏^{たそがれ}時の色町^{いろまち}の灯
 を戀ひしたふそこはかたない心もち ——
 太夫の語る文句の中に夕暮れの描寫はない
 やうだけれども 要^{かな}は何がなしに夕暮れに
 違ひないやうな氣がして 格子^{くわ}の外の宵闇^{よぐみ}
 に蝙蝠^{かぶつり}の飛ぶ町のありさまを —— 昔の大
 阪^{おさか}の商人^{あきんど}町を胸にゑがいた

谷崎潤一郎 「夢喰^{むく}ふ蟲^{むし}」より

昭和五十九年三月 大阪市

碑陰

文字なし



谷崎潤一郎文学碑

所在地 大阪府大阪市中央区日本橋 1-7-6 文楽劇場近く 歩道上

(上段)

二つの紋所

(下段)

べにがらぬ 紅殻塗りの ^{かまち} 框 を見せた二重の上で算盤を枕

に炬燵 ^{こたつ} に足を入れながら おさんの口説き
をじっと聞き入ってゐる間の治兵衛 ——

若い男には誰しもある ^{たそがれどき} 黄昏時の色町の ^ひ 灯
を戀ひしたふそこはかとなない心もち ——
太夫の語る文句の中に夕暮れの描寫はない

やうだけれども ^{かなめ} 要は何がなしに夕暮れに

違ひないやうな氣がして 格子の外の ^{よひやみ} 宵闇

に蝙蝠 ^{かうもり} の飛ぶ町のありさまを —— 昔の大

阪の ^{あきうどまち} 商人町を胸に忍がいた

谷崎潤一郎 「^{たでく} 蓼喰ふ ^{むし} 蟲」より

昭和五十九年三月 大阪市

碑陰

文字なし



闇夜の飛ぶ町のありさま 二重の上で算盤を枕

大の昔 — 谷崎潤一郎の『夢喰ふ蟲』より



谷崎潤一郎歌碑

所在地 兵庫県神戸市東灘区住吉本町二一 阿弥陀寺門前

故郷の花に
こころを残しつつ、
たつやかすみ
の菟原住吉

潤一郎

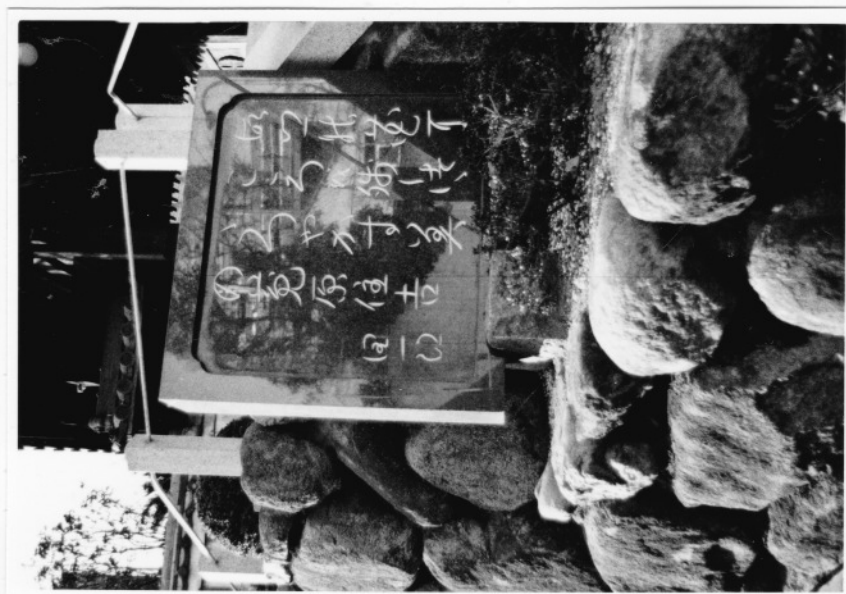
左側面

文豪谷崎潤一郎が永年住みなれた阪神間をあとに熱海へ疎開するため
昭和十九年四月十五日松子夫人ら家族と共に住吉駅を発つ際詠んだ歌
ふるさとの花にこころを残しつつたつやかすみの菟原住吉
この歌碑を潤一郎歿後二十年に当り多数の方々の御協力を得て完成す

昭和六十年四月吉日

谷崎潤一郎の歌碑を建てる会

義彬謹書



谷崎潤一郎歌碑

所在地 兵庫県神戸市東灘区住吉本町 2-1 阿弥陀寺 門前

故郷の花に
こゝろを残しつつ
たつやかすみ
の菟原住吉

潤一郎

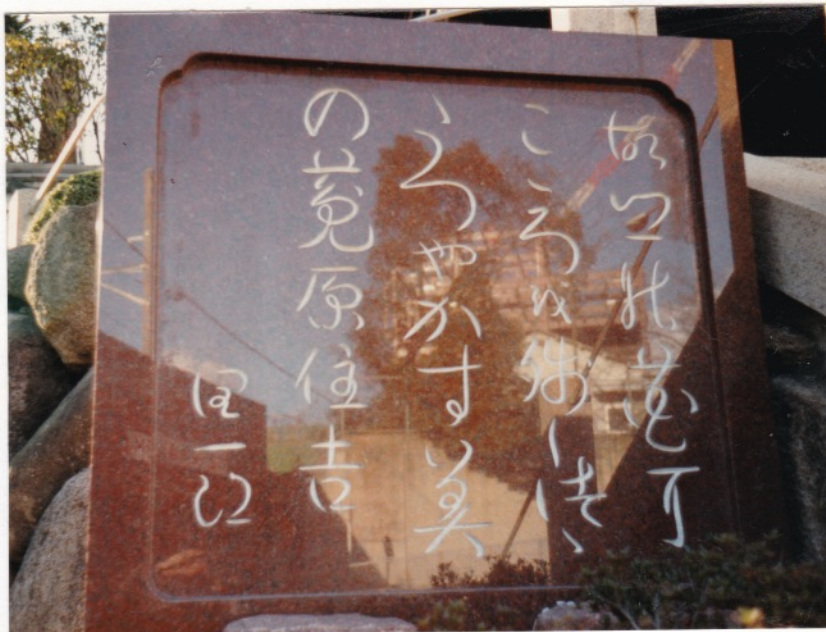
左側面

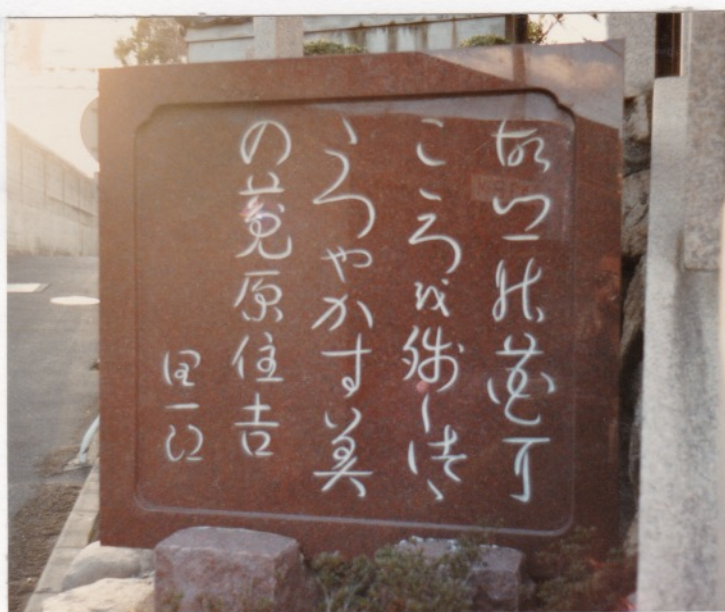
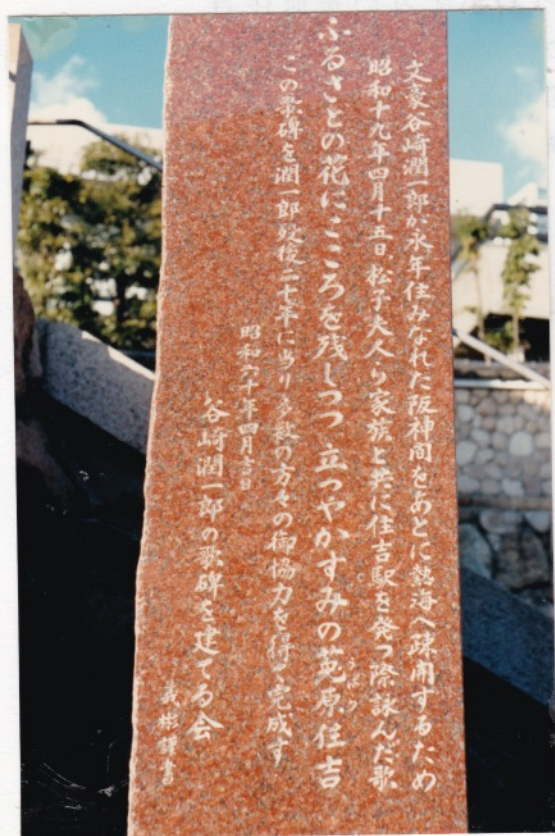
文豪谷崎潤一郎が永年住みなれた阪神間をあとに熱海へ疎開するため
昭和十九年四月十五日松子夫人ら家族と共に住吉駅を発つ際詠んだ歌
ふるさとの花にこころを残しつつ立つやかすみの菟^う原^{はら}住吉
この歌碑を潤一郎歿後二十年に当り多数の方々の御協力を得て完成す

昭和六十年四月吉日

谷崎潤一郎の歌碑を建てる会

義彬謹書





谷崎潤一郎文学碑

所在地 兵庫県神戸市東灘区住吉本町一・二 甲南学園甲南小学校外

雪の模様
雪の模様

細 雪

潤一郎題

雪の模様

碑陰

甲南小学校創立七十五周年
を壽ぎ名作 細 雪の著者
谷崎潤一郎の 生誕百年を
記念して当地に關係の深い
谷崎の書と 小磯良平作の
雪模様を配した碑を
ここに建つ

昭和六十一年十一月吉日

甲 南 小 学 校



谷崎潤一郎記念碑

所在地 兵庫県神戸市東灘区住吉本町 1-12 甲南学園甲南小学校 塀外

雪の模様

雪の模様

細 雪

潤一郎題

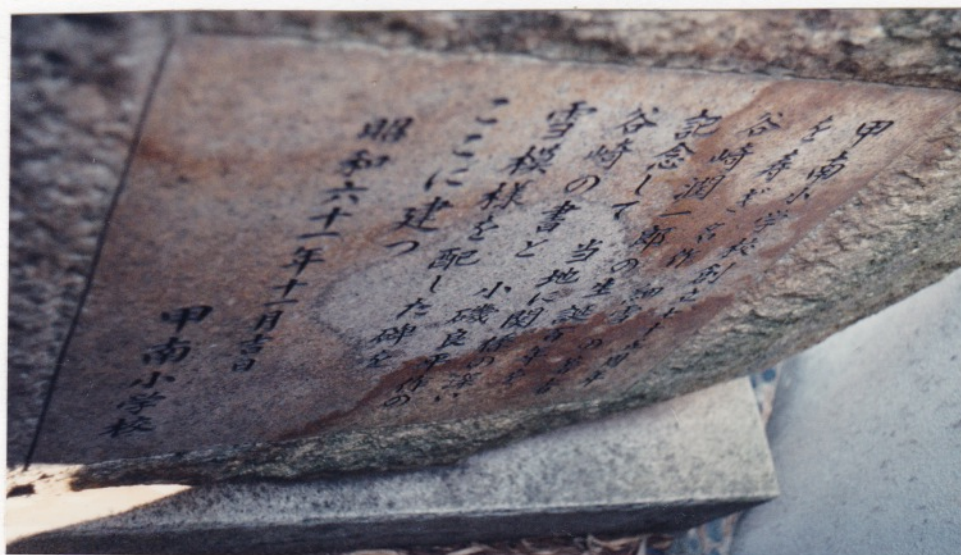
雪の模様

碑陰

甲南小学校創立七十五周年
を寿ぎ名作 細 雪 の著者
谷崎潤一郎の生誕百年を
記念して当地に関係の深い
谷崎の書と 小磯良平作の
雪模様を配した碑を
ここに建つ

昭和六十一年十一月吉日

甲南小学校



谷崎潤一郎文学碑

所在地 兵庫県神戸市東灘区西岡本一丁目 本山第二小学校 語

碑 学 文 崎 谷 豪 文

今朝は妙子は夙川ではなしに、
午前中に本山村野寄の洋裁学院
へ行く日だったので、これぐら
いな雨何でもあらへん、水が出
たら却って面白いわ、などと冗
談を云ひ 出て行つたのを、
止めないで……

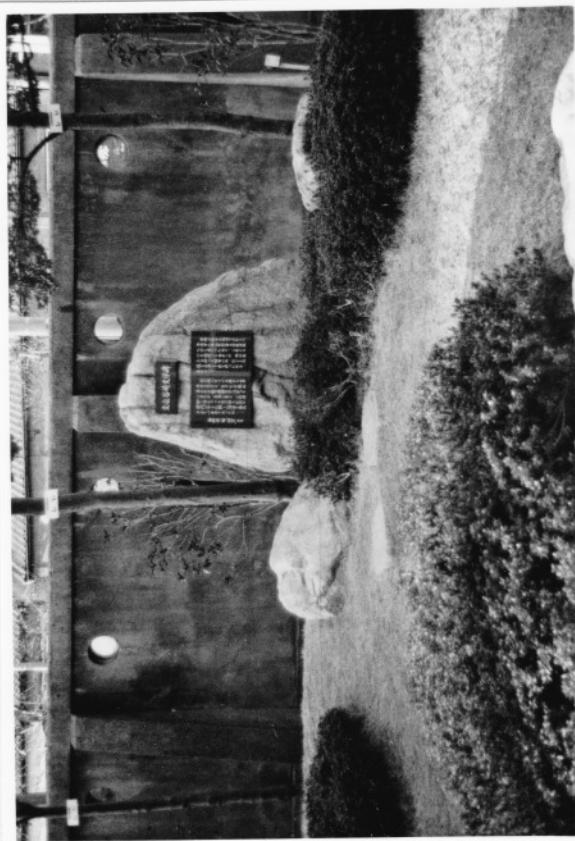
彼が腰かけている席から山手
の方を望むと、ちやうど本山
第二小学校の建物の水に漬かそ
うなのが、真北に見え、一階南
側に並んでいる窓が恰も巨大な
閘門のやうに夥しい濁流を奔出
させているのであったが……

谷崎潤一郎「細雪」より

碑陰

文豪谷崎潤一郎の生誕百年を
記念し昭和十三年七月五日の
阪神大水害で、住吉川から
本山第二小学校に流れ込んだ
巨石に、谷崎文学「細雪」の
一文を刻し、文学碑とする
昭和十三年七月七日

神戸甲南ライオンズクラブ
神戸東灘ライオンズクラブ



谷崎潤一郎文学碑

所在地 兵庫県神戸市東灘区西岡本 1-3-1 本山第二小学校 正門横

文豪谷崎文学碑 (横書き)

(この下に次ぎの文が縦書きで書かれている)

今朝は妙子は夙川ではなしに
午前中に本山村野寄の洋裁学院
へ行く日だったので、これぐら
いな雨何でもあらへん、水が出
たら却って面白いわ、などと冗
談を云ひ 出て行つたのを、
止めないで……

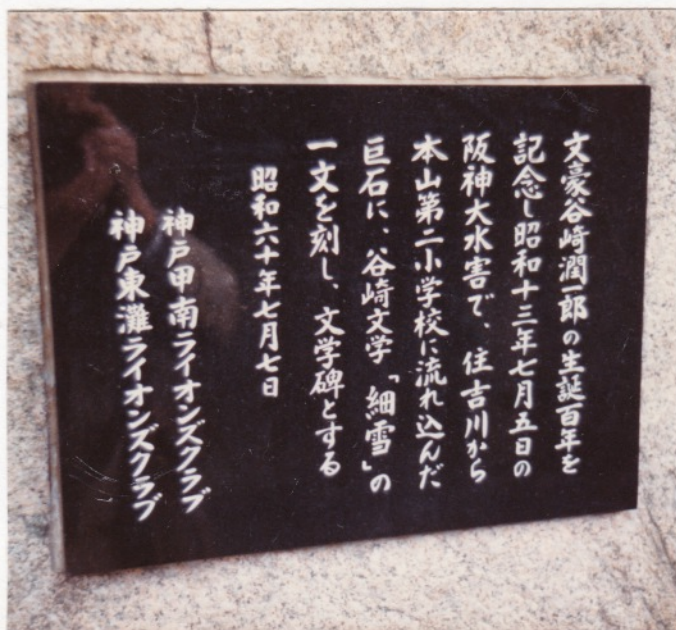
彼が腰かけている席から山手
の方を望むと、 ちょうど本山
第二小学校の建物の水に漬かって
いるのが、真北に見え、一階南
側に並んでいる窓が恰も巨大な
閘門のやうに夥しい濁流を奔出
させているのであったが……

谷崎潤一郎「細雪」より

碑陰

文豪谷崎潤一郎の生誕百年を
記念し昭和十三年七月五日の
阪神大水害で、住吉川から
本山第二小学校に流れ込んだ
巨石に、谷崎文学「細雪」の
一文を刻し、文学碑とする
昭和六十年七月七日

神戸甲南ライオンズクラブ
神戸東灘ライオンズクラブ



谷崎潤一郎文学碑

所在地 兵庫県芦屋市東芦屋町九 閑森橋東ポタツトパーク

雪

松子書

細

碑陰

蘆屋川や高座川の上流の方で山崩れがあつたらしく、阪急線路の北側の橋のところに押し流されて来た家や、土砂や、岩石や、樹木が後からく〳〵と山のやうに積み重なつてしまつたので、流れが其處で堰き止められて、川の兩岸に氾濫した、めに、堤防の下の道路は濁流が渦を巻いてゐて、場所に依つては一丈ぐらゐの深さに達し、一階から救ひを求めてゐる家が澤山あるといふ。

谷崎潤一郎 細雪 より

足立巻一書

芦屋文化協議会

細雪建立実行委員会

昭和六十二年四月六日



谷崎潤一郎文学碑

所在地 兵庫県芦屋市東芦屋町9 開森橋東 ポケットパーク

細 雪 (横書き)

松子書

碑陰(縦書き)

蘆屋川や高座川の上流の方で山崩れがあったらしく、阪急線路の北側の橋のところに押し流されて来た家や、土砂や、岩石や、樹木が後から／＼と山のやうに積み重なってしまったので、流れが其處で堰き止められて、川の兩岸に氾濫したゝめに、堤防の下の道路は濁流が渦を巻いてゐて、場所に依っては一丈ぐらゐの深さに達し、二階から救ひを求めてゐる家が澤山あるといふ。

谷崎潤一郎 細雪 より

足立巻一書

芦屋文化協議会

細雪建立実行委員会

昭和六十一年四月六日



雪 子室



谷崎潤一郎文学碑

所在地 岡山県津山市八子愛山 「松平家墓所」門前

疎開日記より

谷崎潤一郎

池におつる雨の音侘し
因に云ふ此の御殿は明治
初年に城より此處に移し
建てしものの由にて愛山
右々庵と號す。床の間に
松平康倫公の書「愛山」
の軸をかけその上に確堂
書右々庵の額あり。六畳
の間に慎田公夫人静儀の
和歌「山は今朝霞のきぬ
につままれて千代の色そ
ふ松の村立」の額あり。

左側面

右々庵跡

昭和二十年五月十五日

谷崎潤一郎この地に疎開す



谷崎潤一郎文学碑

所在地 岡山県津山市八子愛山 「松平家墓所」門前

疎開日記より

谷崎潤一郎

池におつる雨の音侘し
因に云ふ此の御殿は明治
初年に城より此處に移し
建てしものの由にて愛山
岩々庵と號す。床の間に
松平康倫公の書「愛山」
の軸をかけその上に確堂
書岩々庵の額あり。六疊
の間に慎田公夫人静儀の
和歌「山は今朝霞のきぬ
につゝまれて千代の色そ
ふ松の村立」の額あり。

左側面

岩々庵跡

昭和二十年五月十五日

谷崎潤一郎この地に疎開す



愛山松平家の墓所 ←



谷崎潤一郎歌碑

所在地 鹿児島県川辺郡坊津町泊 九玉神社境内

台所太平記

さつま潟泊の
濱の乙女子は嫁き
てもゆくか伊豆の
猛男に

潤一郎

碑陰

文豪谷崎潤一郎家には昭和十一年頃から初、銀はじめ十数人の郷土出身の女性がお手伝いさんとして仕え文豪の晩作「台所太平記」にこれらの女性が登場し、素朴明朗で生々と活躍しています。碑文はその一女性におくられたもので、このほかにも

「さつま潟泊の浜に漁る日も

伊豆のいでゆを忘れざらん」と、泊の女性をいとしみしのばれた歌があり、いかに文豪がその気風を愛されたかこの晩年の創作によっても知られるのであります。

この碑は、明治百年にあたり文豪とその作品にゆかりの深い郷土女性の純朴さと豊かな人間性を長く讃えようと建立したものです。

昭和四十三年四月六日

坊津町長 長井正雄
明治百年記念事業委員会



谷崎潤一郎歌碑

所在地 鹿児島県南さつま市坊津町泊 九玉神社前

台所太平記

さつま潟とまりの
濱の乙女子は嫁き
てもゆくか伊豆の
猛男に

潤一郎

碑陰

文豪谷崎潤一郎家には昭和十一年頃から初、銀はじめ十数人の郷土出身の女性がお手伝いさんとして仕え 文豪の晩作 「台所太平記」にこれらの女性が登場し、素朴、明朗で生々と活躍しています
碑文はその一女性におくられたもので、このほかにも

「さつま潟泊の浜に漁る日も

伊豆のいでゆを忘れざらん」
と、泊の女性をいとしみしのばれた歌があり、いかに文豪がその気風を愛されたかこの晩年の創作によっても知られるのであります

この碑は、明治百年にあたり文豪とその作品にゆかりの深い郷土女性の純朴さと豊かな人間性を長く讃えようと建立したものです

昭和四十三年四月六日

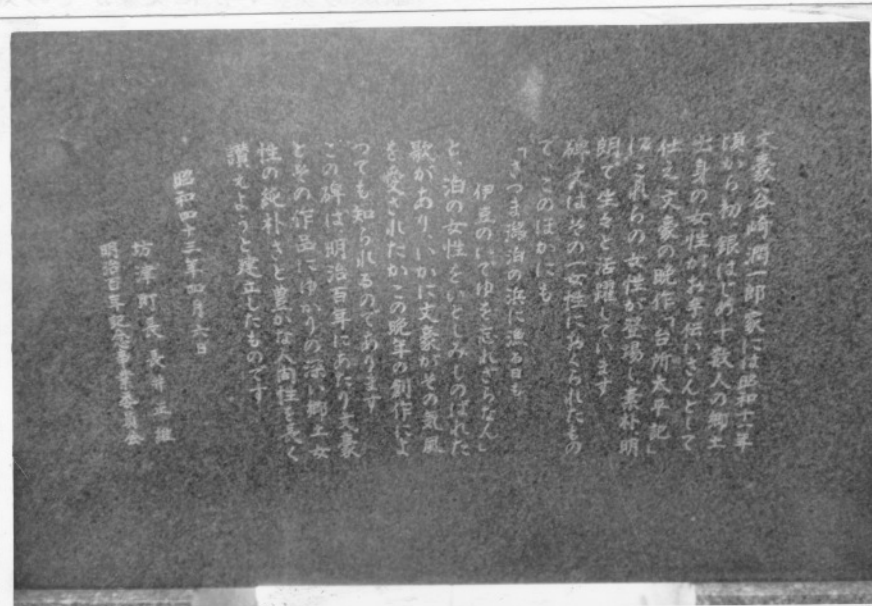
坊津町長 長井正雄
明治百年記念事業委員会

泊と九玉神社
↓





風景の手紙文二つで、せうぶ



種田山頭火句碑

所在地 宮城県仙台市青葉区上杉四丁目 光禪寺前

逢へばしみじみ

抱壺逝けるかよ

山頭火

黙ってるても

水仙のしほるる

ごとく

かつこうよ

抱壺居にて

抱壺の計に接して

左側面

俳僧種田山頭火仙台の自由律俳友海藤抱壺を病床に訪ねしときの一句と後年抱壺の靈前に供へし六句の中の一句を併録し山頭火羈泊ゆかりの地に句碑を建立し五十回忌追善の標とする

平成元季六月廿三日 みちのく山頭火の会 三河知多山頭火の会

右側面

抱壺君にだけは是非逢ひたい。汽車に乗る。青い山、青い野、あゝこの憂鬱この苦悩、くずれ行く身心。六時すぎ仙台着、抱壺君としみじみ話す。

予期たち元気がよいのがうれしい。どちらが病人か、歩々生死、刻々去来。

昭和十二(一九三〇)年六月廿日の旅日記の一節より

岡島良平書

碑陰

人数多数(略)



種田山頭火句碑

所在地 宮城県仙台市青葉区上杉 4-4-50 光禅寺前

逢へばしみじみ

抱壺逝けるかよ

黙ってゐても

水仙のしほるる

山頭火

かつこうよ

ごとく

抱壺居にて

抱壺の計に接して

左側面

俳僧種田山頭火仙台の自由律俳友海藤抱壺を病床に訪ねしときの
一句と後年抱壺の霊前に供へし六句の一句を併録し山頭火覇泊ゆかり
の地に句碑を建立し五十回忌追善の標とする

平成元季六月廿三日 みちのく山頭火の会 三河知多山頭火の会

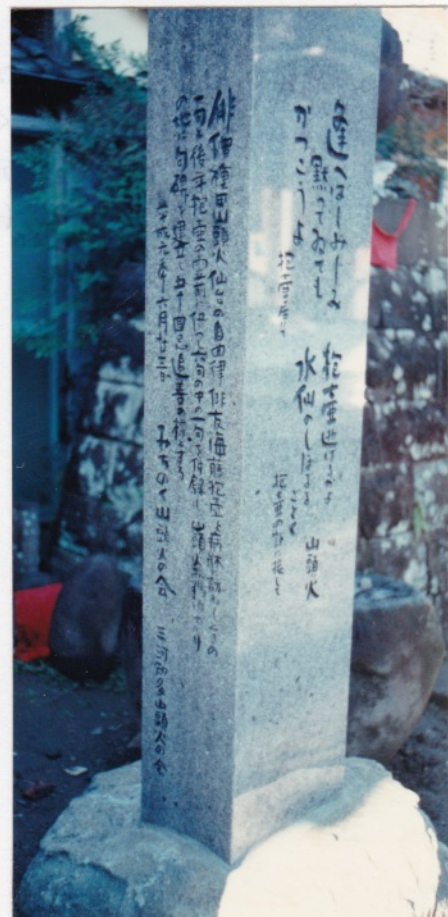
右側面

抱壺君にだけは是非逢ひたい。汽車に乗る。青い山、青い野、あゝこの憂
鬱この苦悩、くずれ行く身心、六時すぎ仙台着、抱壺君としみじみ話す。
予期したより元気がよいのがうれしい。どちらが病人か、歩々生死、刻々去来。

昭和十一(一九三六)年六月廿三日の旅日記の一節より 岡島良平書

碑陰

人数多数(省略)



種田山頭火句碑

所在地 宮城県石巻市 日和山公園内

水底の雲もみちのくの空のさみだれ
あふたりわかれたりさみだるゝ

山頭火

右側面

早い朝湯にはいつてから日和山の展望をたのしむ。
美しい港風景である。芭蕉句碑もあった。

—— 昭和十二癸亥年六月廿日山頭火旅日記の一節 ——

左側面

磊落風狂の俳僧種田山頭火は友人佐藤露江を訪ねて此の地に
漂泊し二句を遺した。茲にそのときの吟詠を刻して五十回忌
追慕の碑とする。平成元年六月廿五 みちのく山頭火の会

書 岡島良平



種田山頭火句碑

所在地 宮城県石巻市日和が丘2丁目 日和山公園内 あずま屋傍ら(駐車場隣)

水底の雲もみちのくの空のさみだれ
あふたりわかれたりさみだるゝ

山頭火

右側面

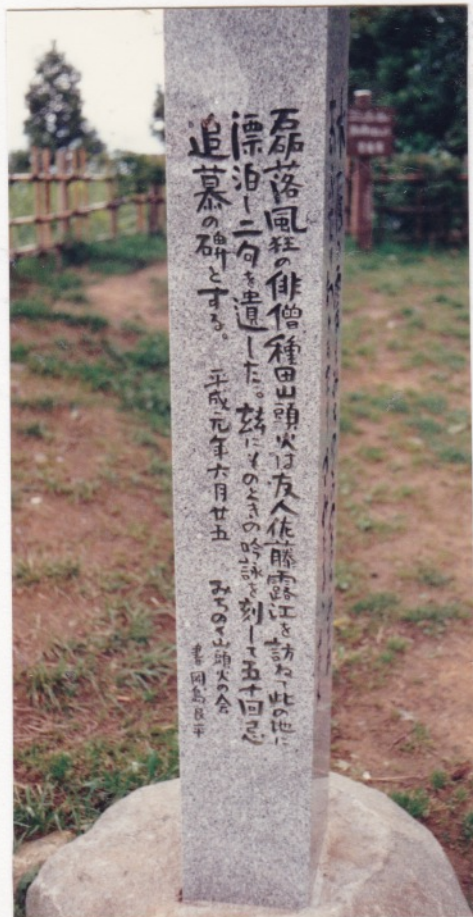
早い朝湯にはいってから日和山の展望をたのしむ。
美しい港風景である。芭蕉の句碑もあった。

— 昭和十一(一九三六)年六月廿六日山頭火旅日記の一節 —

左側面

磊落風狂の俳僧種田山頭火は友人佐藤露江を訪ねて此の地に
漂泊し二句を遺した。茲にそのときの吟詠を刻して五十回忌
追慕の碑とする。平成元年六月廿五 みちのく山頭火の会

書 岡島良平



種田山頭火句碑

所在地 山形県尾花沢市横町四〇五二 石沢芳雄氏宅前庭

分け入っても分け入っても青い山 山頭火

碑陰

昭和五十二年十月 芳雄建立

所在地 東京都荒川区西日暮里三十一 本行寺境内

ほっと 東京に来てゐる 山頭火
月がある

碑陰

十五日 友人一同建立



種田山頭火句碑

所在地 山形県尾花沢市横町 4206-2 石沢芳雄氏宅前庭

分け入っても分け入っても青い山 山頭火

碑陰

昭和五十三年十月 芳雄建立

所在地 東京都荒川区西日暮里 3-1 本行寺境内

ほんと 東京に来てゐる 山頭火
月がある

碑陰

昭和六十一年十一月十五日 友人一同建立





種田山頭火句碑

所在地 山梨県北巨摩郡高根町 一四号線沿い 風の丘公園内

行き暮れて

なんとここらの

水のうまさほ

山頭火詠

昭堂書

碑陰

種田山頭火 句碑

行き暮れてなんとここらの

水のうまさほ

明治十五年十二月三日 山口県佐波郡佐波令村に生まる。早稲田大
学に学ぶが中退。帰郷して酒造業を営む。大正三年荻原井泉水に師事し「
層雲」に出句する。五年種田家破産。十四年出家得度して。耕畝と改名、
味取観音の堂守となるが、山林独住に
耐えかねて行乞流転。のち其中庵、風来居、一草庵に転々住する。山
その間全国を一鉢一笠の行脚をする。昭和十一年五月山梨から信州佐久
方面へと向かう折り当地辺にて句作する。句は自己の心奥の倦怠・嘆き・
悟りの揺れが表白されている。



平成三年三月吉日 高根町

種田山頭火句碑

所在地 山梨県北杜市高根町 141 号線沿い 風の丘公園内

行き暮れて
なんところらの
水のうまさは
山頭火詠 昭堂書

碑陰

種田山頭火 句碑

行き暮れてなんところらの
水のうまさは

明治十五年十二月三日 山口県佐波郡佐波令村に生れる。早稲田大学に学ぶが中退、帰郷して酒造業を営む。大正三年荻原井泉水に師事し「層雲」に出句する。五年種田家破産。

十四年出家得度して耕畝と改名、味取観音の堂守となるが、山林独住に耐えかねて行乞流転。のち其中庵、風来居、一草庵に転々住する。

その間全国を一鉢一笠の行脚をする。昭和十一年五月山梨から信州佐久方面へと向かう折り当地辺にて句作する。句は自己の心奥の倦怠・嘆き・悟りの揺れが表白されている。

平成三年三月吉日 高根町

蘇山山頭山頭山頭山頭



行もさふらんなんこころいし
おちまゐの木。



種田山頭火句碑

所在地 長野県岡谷市湊四十二、花岡茂雄氏宅庭内

うれしい
ことも
かなしい
ことも
草しける
山頭火

碑陰

昭和九年七月十一日
花岡茂雄建立

所在地 長野県飯田市今宮四基六丸山公民館前

山
しづかなれば
笠ぬいで
ゆく
山頭火

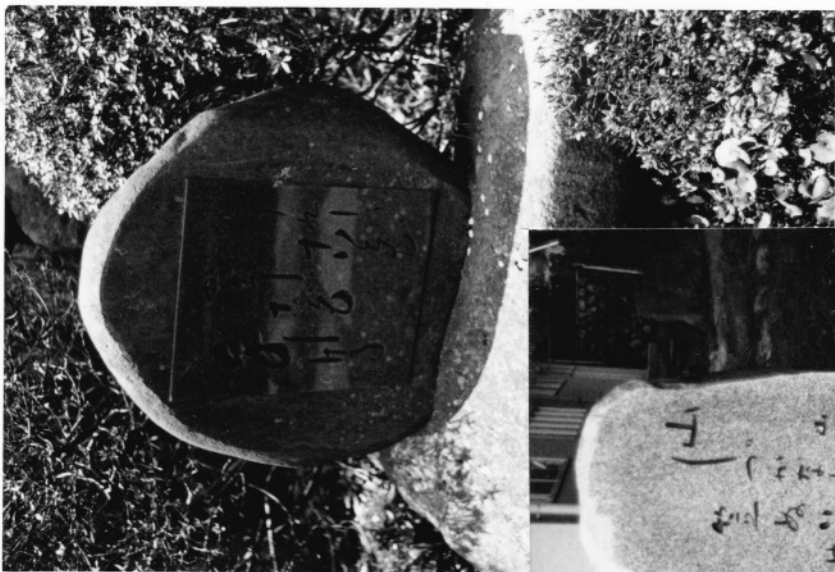
碑陰

山頭火は山口県防府市の人昭和九年四月来飯今宮風越館の花月庵句会に臨み肺炎のため川島医院に入院九死に一生を得て其中庵に帰るその旧跡に此の碑を建つ

昭和五十八年十一月

山頭火を偲ぶ會 村澤武夫

澄太
かく



種田山頭火句碑

所在地 長野県岡谷市湊 4-10-26 花岡茂雄氏宅庭内

うれしい

ことも

かなしい

ことも

草しける

山頭火

碑陰

昭和五十九年七月十一日

花岡茂雄建立

所在地 長野県飯田市今宮 4-5609 丸山公民館前

山

山頭火

しづかなれば

笠ぬいで

ゆく

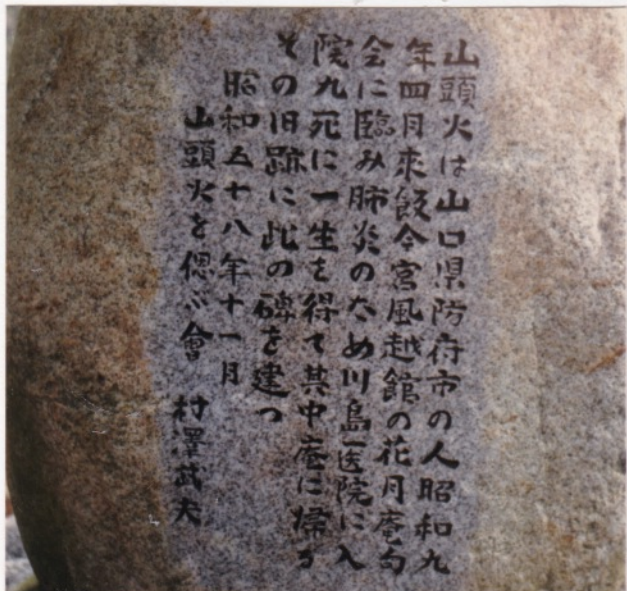
碑陰

澄太
かく

山頭火は山口県防府市の人昭和九年四月来飯今宮風越館の花月庵句会に臨み肺炎のため川島医院入院九死に一生を得て其中庵に帰るその旧跡に此の碑を建つ

昭和五十八年十一月

山頭火を偲ぶ會 村澤武夫



種田山頭火句碑

所在地 長野県下伊那郡清内路村 七々平

山ふかく

路のとうなら

咲いてゐる

山頭火

碑陰

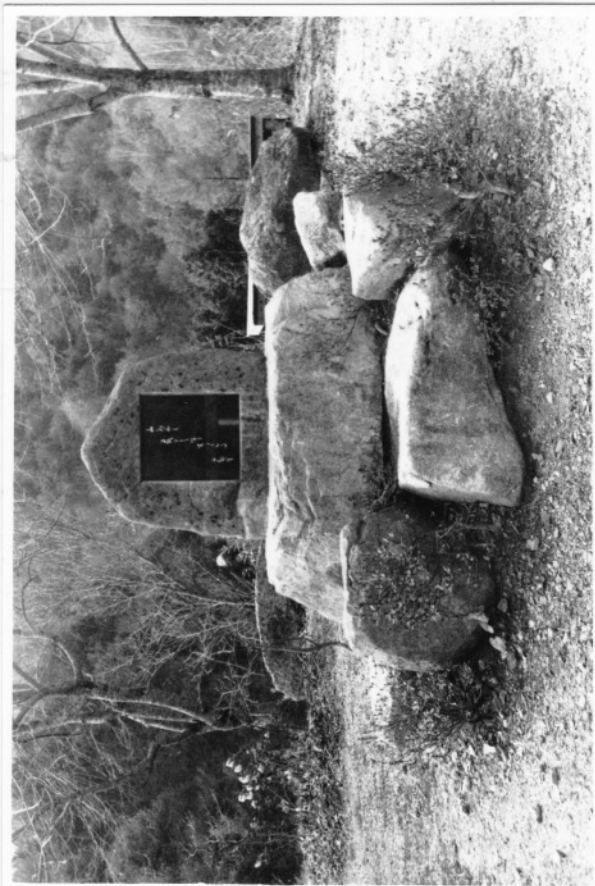
日記抄

昭和九年四月十四日 坂下から清内路へ
曇やがて晴、そろそろ寒い春がおそい今年で、
さらに春がおそいこのあたりで。
四月十五日、清内路から飯田町へ、
四月十五日、十六日、十七日、十八日、十九日 廿日 蛙堂居、
四月廿一日、* 廿七日 川島病院
四月廿八日、大死一番、天地一枚
(病氣のため詳しく書いていません、十四日 清内路に一泊
しています)

澄太

昭和五十九年九月二十九日建之

清内路 山頭火の会



種田山頭火句碑

所在地 長野県下伊那郡清内路村 七々平茶屋

山 ふ か く

落 の と う な ら

咲 い て ゐ る

山 頭 火

碑陰

日 記 抄

昭和九年四月十四日 坂下から清内路へ

曇り やがて晴、そぞろ寒い 春が お そ い 今年で、
さらに春が おそい このあたりで。

四月十五日、 清内路 から 飯田町へ、

四月十五日、十六日、十七日、十八日、十九日 廿日 蛙堂居、

四月廿一日、*～ 廿七日 川島医院

四月廿八日、大死一番、天地一枚

(病気のため詳しく書いていません、十四日 清内路に一泊
しています)

澄太

昭和五十九年九月二十九日建之

清内路 山頭火の会



種田山頭火句碑

所在地 静岡県下田市四丁目六七 泰平寺境内

伊豆は

あたたかく

野宿によろしい

波音も

山頭火

澄太かく

碑陰

昭和五十七年三月二十七日

當山二十一世碩宗 建之

種田山頭火は 昭和十一年
四月伊豆の俳友をだすねる
旅をした 生前の山頭火と
親しく 死後その顕彰につ
とめた大山澄太氏の揮毫に
より 句碑の建立となる

記 美花

略歴

種田山頭火 本名 正一 明治十五年十二月三日 山口県古敷郡防府町八王子に
生まれる 早大文学部中退 昭和十五年十月十一日歿す 享年五十七歳 法名 解脱
院山頭火耕畝居士 墓は山口県防府市本橋町二十一 護国寺墓地と 熊本市
横手町三十二六八 安国禅寺墓地とにある



種田山頭火句碑

所在地 静岡県下田市四丁目 6・7 泰平寺境内

伊豆は
あたたかく
野宿によろしい
波音も

山頭火
澄太かく

碑陰

昭和五十七年三月二十七日
當山二十一世碩宗 建之

種田山頭火は 昭和十一年
四月伊豆の俳友をたずねる
旅をした 生前の山頭火と
親しく 死後その顕彰につ
とめた大山澄太氏の揮毫に
より 句碑の建立となる

記 美花

略歴

種田山頭火 本名 正一 明治 15 年 12 月 3 日 山口県吉敷郡防府町八王子に
生れる 早大文学部中退 昭和 15 年 10 月 11 日歿す 享年 57 歳 法名 解脱院
山頭火耕畝居士 墓は山口県防府市本橋町 2-11 護国寺墓地と 熊本市横手町
3-26-8 安国禅寺墓地とにある



蘇



山崎大野の墓

明治三十七年三月五日



種田山頭火句碑

所在地 愛知県知多郡美浜町河和北屋敷三 「堀田屋旅館」前

とめられて泊って海の音 山頭火

大きいのが小さいのが招き猫が春の夜

右側面

俳人山頭火昭和十四年四月十七日僚友斎藤帰城子の堀田屋に
漂寓して二句を詠む今茲五十年の忌辰にあたり往時を偲んで建碑する
昭和六十二年十月十一日 三河知多山頭火の会 書岡島良平

裏面 左側面 共に人名多数列記（省略）



種田山頭火句碑

所在地 愛知県知多郡美浜町河和北屋敷 32 「堀田屋旅館」前

とめられて泊って海の音 山頭火
大きいのが小さいのが招き猫が春の夜

右側面

俳人山頭火 昭和十四年四月十七日 僚友 斎藤婦城子の 堀田屋に
漂寓して二句を詠む今茲五十年の忌辰にあたり往時を偲んで建碑する
昭和六十三年十月十一日 三河知多山頭火の会 書 岡島良平

碑陰 左側面

共に人名多数列記(省略)



孔雀サボテン

種田山頭火句碑

所在地 三重県鈴鹿市神戸町二二〇 龍(りゅう)光寺 横門内

分け入っても 山頭火

分け入っても青い山



碑陰

倉田行人子が生前山
頭火と机を並べて俳
句の勉強をした因縁
により ここにあわ
せて山頭火の代表句
を残す

閑栖 宗峰賢讓
現住 宗龍弘行

(参考)

近くに「倉田行人子句碑」がある

日の丘に

立ちて

寥朗の

秋を見る

行人子

碑陰

平成二年十二月

倉田行人子(こうじんし)は明
治二十六年四月一日、現在の鈴鹿
市木田町に生まれ、本名を新松と
いう。明治四十三年上京し、白田
亜浪の「石楠」に参加し同、人とな
る。大正十二年の大震災後、故郷
に帰り「浜荻」を創む。昭和五
十九歳で神戸本多町に歿す。句集
に『丘に立ちて』がある。日、八
神戸城址で詠まれたこの句は行
人子の代表作で大正十三年「石楠」
に発表された。

閑栖 宗峰賢讓
現住 宗龍弘行

種田山頭火句碑

所在地 三重県鈴鹿市神戸町 2-20 龍光寺(りょうこうじ) 横門内

分け入っても 山頭火

分け入っても 青い山

碑陰

倉田行人子が生前山
頭火と机を並べて俳
句の勉強をした因縁
により ここにあわ
せて山頭火の代表句
を残す

閑栖 宗峰賢譲

現住 宗龍弘行

(参考) 近くに「倉田行人子句碑」がある

日の丘に

立ちて

寥朗の

秋を見る

行人子

碑陰

倉田行人子(こうじんし)は明治二十六年四月一日、現在の鈴鹿市木田町に生まれ、本名を新松という。明治四十三年上京し、臼田亞浪の「石楠」に参加し同人となる。大正十二年の大震災後、故郷に帰り「浜荻」を創む。

平成二年十二月

昭和五十七年二月二十五日、八十九歳で神戸本多町に歿す。句集に『丘に立ちて』がある。

神戸城趾で詠まれたこの句は行人子の代表作で大正十三年「石楠」に発表された。

閑栖 宗峰賢譲／現住 宗龍弘行





種田山頭火句碑

所在地 京都府京都市東山区今熊野宝蔵町二、即成寺門前

鬼手佛心

北 朗

右側面

鐵鉢の中へも 山頭火
霞散

左側面

分け入っても分け入っても 山頭火
青い山

裏面

昭和五十年一月

久保田利政建

所在地 京都府京都市左京区南禅寺草川町二 料亭「順正」前庭

こんやは

雨がふる

春雨

碑陰

不明

山頭火

〇〇八十二回



種田山頭火句碑

所在地 京都府京都市東山区今熊野宝蔵町 70 即成寺門前

鬼手佛心 北 朗

右側面

鐵鉢の中へも 山頭火

霰

左側面

分け入っても分け入っても青い山 山頭火

裏面

昭和五十年一月

久保田利政建

所在地 京都府京都市左京区南禅寺草川町 60 料亭「順正」前庭

こんやは

雨がふる

春雨

山頭火

□□八十二回

碑陰

不 明

即成寺の門



雨 春

大蔵山

四二十八口口

南禅寺北側



南禅寺北側



南禅寺山門（三枚とち）



種田山頭火句碑

所在地 京都府宇治市宇治塔の川一五 「対鳳庵」近く

春風の扉ひらけば

南無阿彌陀佛

碑陰

昭和十三年宇治平等院にて

種田山頭火

久保田利政

山頭火

所在地 京都府宇治市横島町中川原四二 皆演寺境内

花いばら

ここの

土と

ならうよ

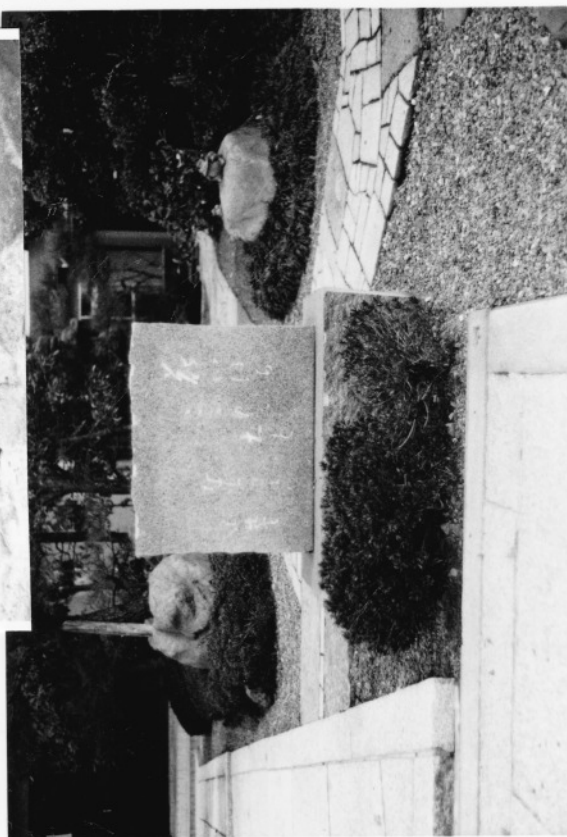
碑陰

昭和五十五年

久保田利政建之

西山楨一書

山頭火



種田山頭火句碑

所在地 京都府宇治市宇治塔の川 1-5 「対鳳庵」近く

春風の扉ひらけば

南無阿彌陀佛

山頭火

碑陰

昭和十一年宇治平等院にて

種田山頭火

施久保田利政

所在地 京都府宇治市槇島町中川原 141 皆演寺境内

花いばら

こゝの

土と

ならうよ

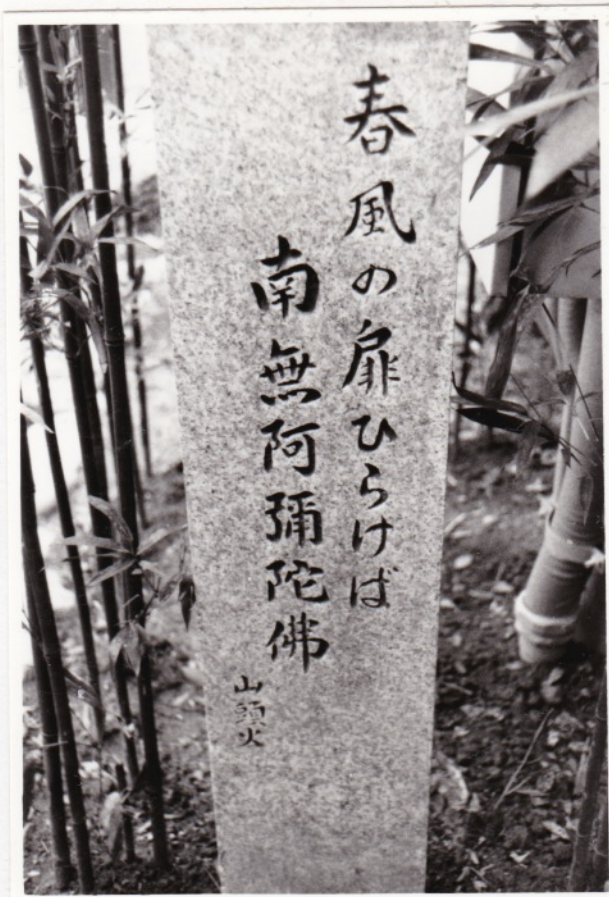
山頭火

碑陰

昭和五十五年

久保田利政建之

西山禎一書



内閣省圖書 111 鳳凰堂 宇治市宇治郡宇治町 鳳凰堂



宇治市
平家院
鳳凰堂
↓





重文
十三重
石塔
宇治川原↓



種田山頭火・層雲句碑

所在地 大阪府大阪市住吉区杉本町二丁目十 光明寺境内

いわおにじを吐く

井泉水 露

竹を植えたもう風が来ている

北 朗 内

水に冷やしてあるは親子二人の二つの桃

榎 木 斎

まったく雲がない笠立をぬぎ

山頭火 種

こんなよい月を一人で見ている

放 哉 露

かきやきのきわみ白波うち返し

朱鱗洞 野

手足休んでいる

鳳 車 彦

こしかけて鳥のゆく空

仙醉楼 彦

うちのすいめも雨の日は雨にぬれている

緑 平 秀

春の白に富士に犬が来ている野の道

秋紅夢 秋山

雨に立ちひばり冠を着けて居る

此君楼 葉

層雲句碑 昭和三十三年五月建之

石匠 岩井茂春



種田山頭火・層雲句碑

所在地 大阪府大阪市住吉区杉本町 2・20・10 光明寺境内

いわおにじを吐く
竹を植えたもう風が来ている
水に冷やしてあるは親子三人の三つの桃
まったく雲がない笠をぬぎ
こんなよい月を一人で見てねる
かゞやきのきわみ白波うち返し
手足休んでいる
こしかけて鳥のゆく空
うちのすゞめも雨の日は雨にぬれている
春の白い富士に犬が来ている野の道
雨に立ちひばり冠を着けて居る
層雲句碑 昭和三十三年五月建之

井泉水(荻原)
北 朗(内島)
裸 木(大橋)
山頭火(種田)
放 哉(尾崎)
朱鱗洞(野村)
鳳 車(芹田)
仙酔楼(酒井)
緑 平(木村)
秋紅蓼(秋山)
此君楼(青木)

石匠 岩井茂春

種田山頭火句碑

所在地 鳥取県鳥取市安長五箇 東円寺境内

松はみな

枝たれて

南無観世音

山頭火

碑陰

文字なし

所在地 鳥取県八頭郡用瀬町二四二 用瀬町郷土資料館 前庭

分け入っても

分け入っても

青い山

山頭火

碑陰

昭和五十九年三月吉日建之



種田山頭火句碑

所在地 鳥取県鳥取市安長 544 東円寺境内

松はみな

枝たれて

南無観世音

山頭火

碑陰

文字なし

所在地 鳥取県鳥取市用瀬町 104-2 用瀬町郷土資料館 前庭

分け入っても

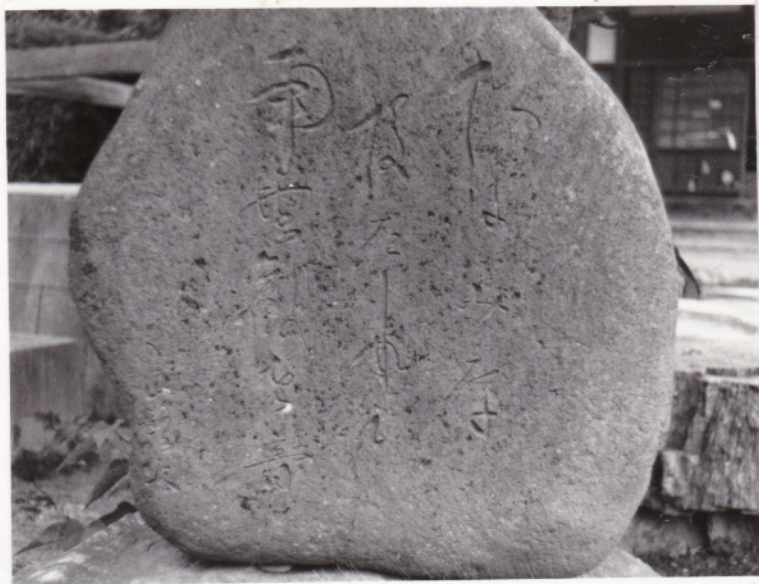
分け入っても

青い山

山頭火

碑陰

昭和五十九年三月吉日建之



種田山頭火句碑・川本緑石句碑

所在地 鳥取県西伯郡大山町三毛 大山寺 清光庵前

くう
として
水を
味ふ
山頭火
旅中所見

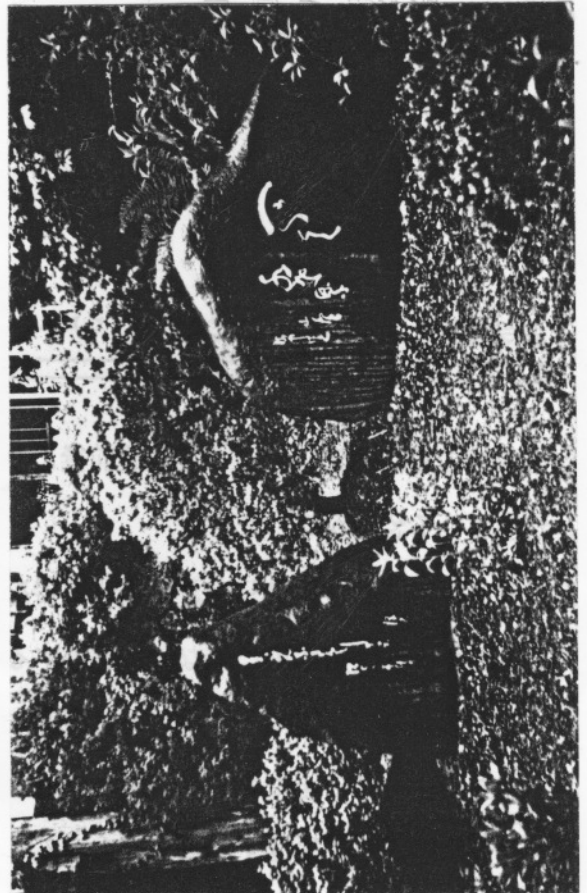
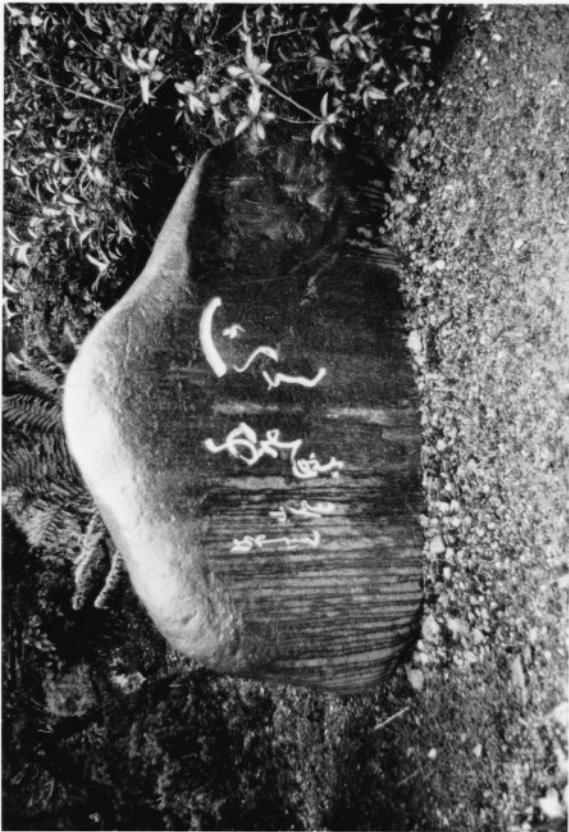
碑陰
昭和六十年九月二十五日
建之
山頭火研究会
緑石をおこす会

緑石

星、みんなきえてしまった

頂上にすはる

左側面
昭和六十年九月二十五日建之
緑石をおこす会
山頭火研究会



種田山頭火句碑・川本緑石句碑

所在地 鳥取県西伯郡大山町大山 27 大山寺 清光庵前

へ う へ

として

水 を

味 ふ

山 頭 火

旅 中 所 見

碑陰

昭和六十年九月二十五日

建之

山頭火研究会

緑石をおかす会

緑 石

星、みんなきえてしまった

頂上にすはる

左側面

昭和六十年九月二十五日建之

緑石をおこす会

山頭火研究会



田蘇

雨

水

名 親



御

御十二日北城十文城



種田山頭火句碑

所在地 広島県三原市高坂許山麓 佛通寺境内 池畔

あけはなつや

満山のみどり

碑陰

昭和四十九年四月建之

山頭火



種田山頭火句碑

所在地 広島県三原市高坂許一番地 佛通寺境内 池畔

あけはなつや

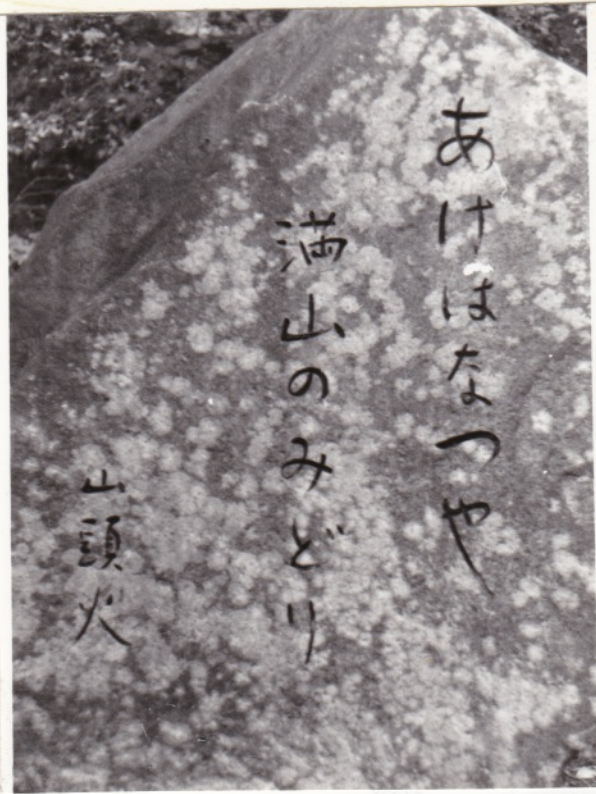
満山のみどり

山頭火

碑陰

昭和四十九年四月建之





仙通寺へ門と塀 ←

種田山頭火句碑

所在地 山口県山口市湯田温泉 高田公園内

はろく酔つて 山頭火

木の葉ふる

碑陰

当二十三回忌友人建之

(注) 建立は昭和三十七年二月

所在地 山口県山口市湯田温泉三丁目 錦川通り

ちんぽこも

おそそも

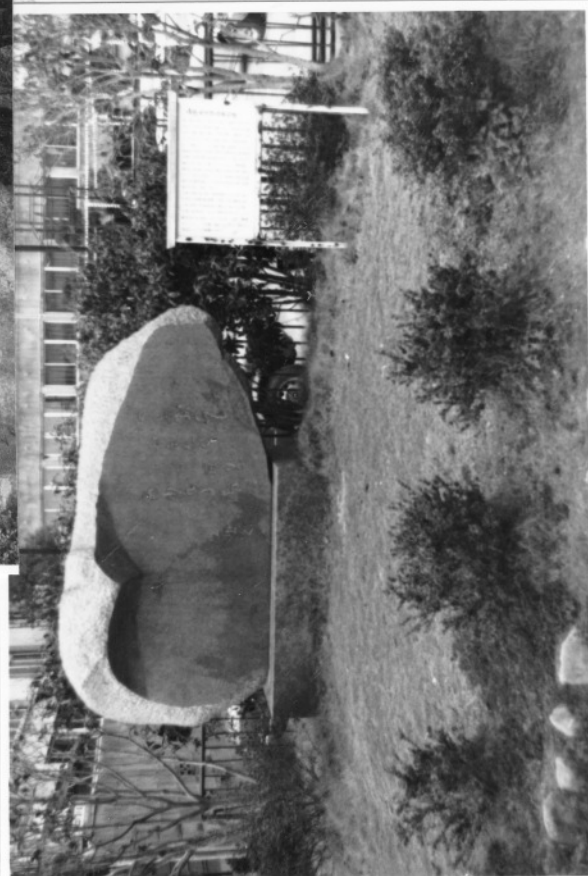
湧いて

あふれる湯

山頭火

碑陰

設計 工 昭 錦
施設 和 川
服部 有 5 通
徳並 1 1 保
碩夫 1 1 存
石 1 1 会
材 1 1 建
店 月 之



種田山頭火句碑

所在地 山口県山口市湯田温泉 高田公園内

ほろ／＼酔うて 山頭火
木の葉ふる

碑陰

当二十三回忌友人建之
(注) 建立は昭和三十七年十一月三日

所在地 山口県山口市湯田温泉 3 丁目 錦川通り

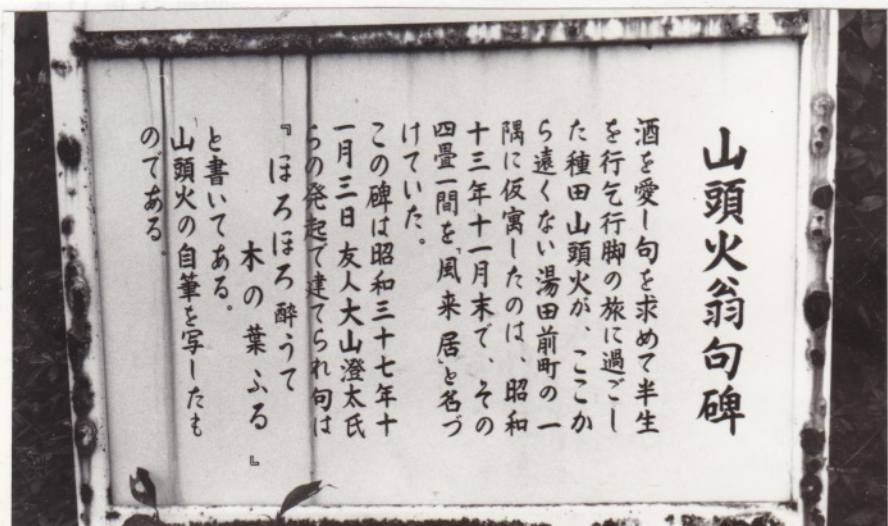
ちんぽこも
おそそも
湧いて
あふれる湯
山頭火

碑陰(横書き)

設計 服部碩夫
施工 (有)徳並石材店
昭和 51 年 11 月
錦川通り保存会建之



斎







種田山頭火句碑

所在地 山口県吉敷郡小郡町矢足 其中庵庭内

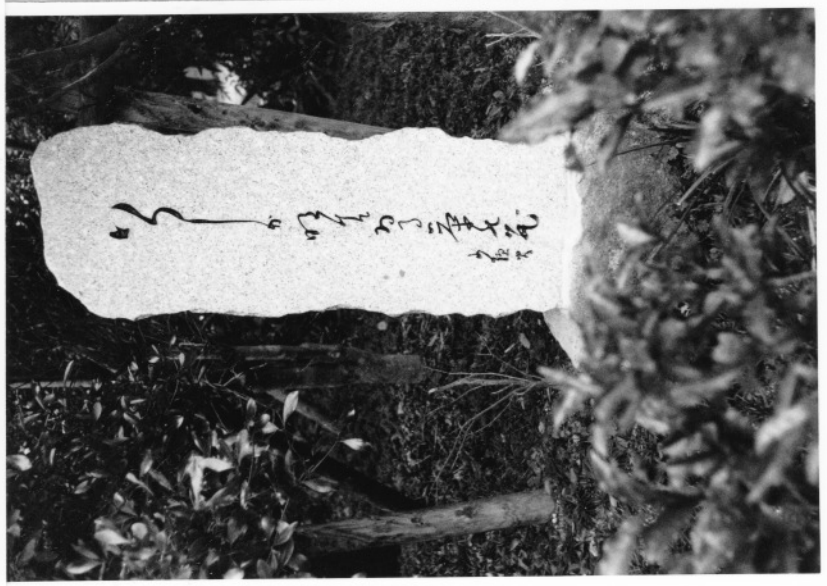
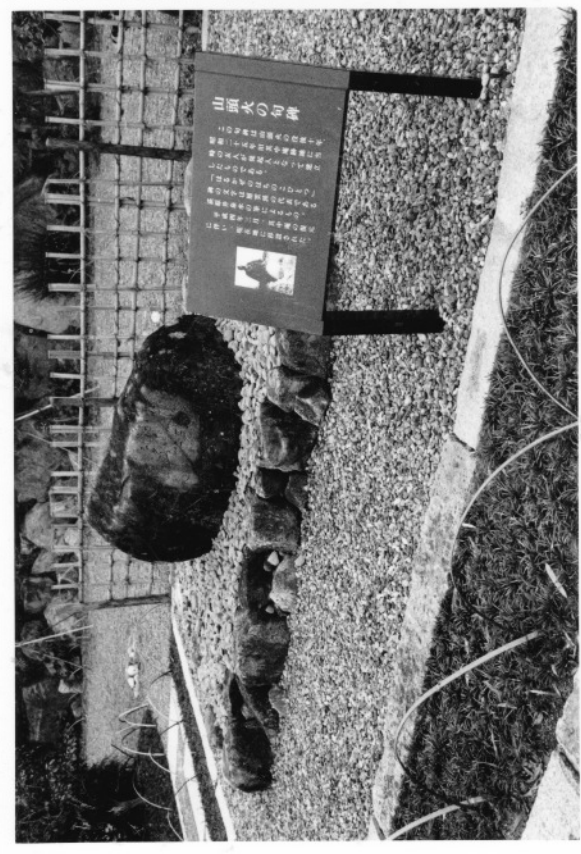
はる
かぜの
はちのこ
ひとつ
山頭火

碑陰 其 中 庵 跡
1950・10・11
友 人 建 之

所在地 山口県吉敷郡小郡町矢足 其中庵庭内

いつしか明けてゐる茶の花
山頭火

碑陰 小郡山頭火をしのぶ会
一九九四・四・一建立



種田山頭火句碑

所在地 山口県山口市小郡町矢足 雨乞山其中庵庭内

はる

かぜの

はちのこ

ひとつ

山頭火

碑陰(横書き)

其中庵跡

1950・10・11

友人建之

所在地 山口県山口市小郡町矢足 雨乞山其中庵庭内

いっしか明けてゐる茶の花



山頭火

碑陰

小郡山頭火をしのぶ会

一九九四・四・一建立







山頭火の句碑

この句碑は山頭火の没後十年、昭和二十五年旧其中庵跡地に当時の友人が発起人となって建立したものである。

「はるかぜのはちのこひとつ」碑の文字は層雲派の代表である萩原井泉水の筆によるもの。

平成四年三月、其中庵の復元に伴い、現在地に移設された。



山頭火の句碑

この句碑は山頭火の没後十年、昭和二十五年旧其中庵跡地に当時の友人が発起人となって建立したものである。

「はるかぜのはちのこひとつ」碑の文字は層雲派の代表である萩原井泉水の筆によるもの。

平成四年三月、其中庵の復元に伴い、現在地に移設された。



